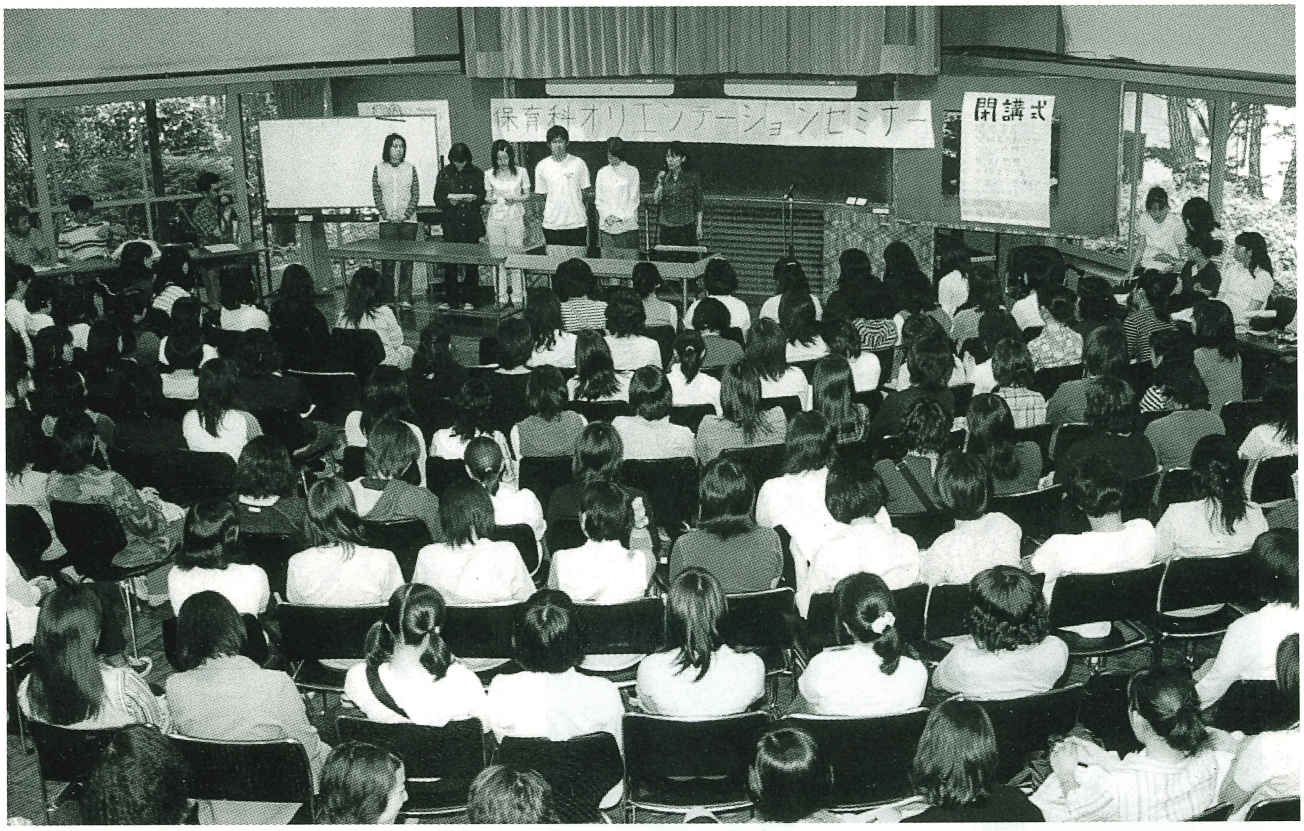
SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.155

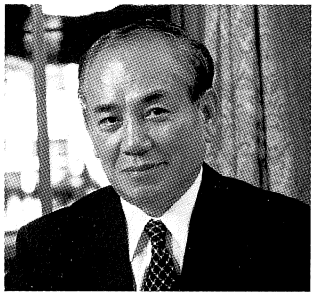
1999.4・5・6

■わが大学
東京女子大学学長　船本弘毅　／2
■座談会
国際的に通用するエンジニアの育成とは
—ＪＡＢＥＥを考える—　／3・4・5・6
■これから開催される主催プログラムトピック　／7
■ホームページをご覧下さい。　／7
■法人ニュース　／8・9・10
理事会評議員会報告・協力会員校事務連絡会報告・
教育プログラム委員会報告・平成10年度収支計算書
（一般会計・千人会）
■花ごよみ　／10
■出版物のお知らせ　／11
■ひとこと　／11
■シジュウカラのその後　／11
■寄贈図書・寄付　／11
■私の国際交流　／12
■新入生合宿に参加して　／12・13・14
■新入生オリエンテーション合宿実施状況・割引料金
のお知らせ　／14
■利用状況　／15
■主催プログラム予定表　／16
■館長室から　／16



Plain living and high thinking

財団法人　大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
ホームページ　http://www.mesh.ne.jp/iush/



伝統を今に生かす

東京女子大学

学長　船本弘毅

東京女子大学は北米プロテスタント諸教派の祈りと支えによって一九一八年に誕生し、新渡戸稲造博士を初代学長として今日まで、多くの優れた指導者また協力者によって導かれて歩んで来ました。4万人におよぶ卒業生が日本はもちろん世界の各地で良い働きを続けています。

わたしは基本的には、まず第一に東京女子大学が、その歴史の中で大切に守り続けて来た建学の精神と伝統をこの時代に正しく継承すると共に、第二に21世紀を目前にして、女性の社会的活動が新しい時代を迎えようとしている時、それに相応しい変革を推し進めなければならないと考えています。

第一の点に関しては、キリスト教に基づくリベラル・アーツの伝統に沿って、最高の教育を行うことに全力を集中しなければなりません。「すべて真実なこと」（フィリピの信徒への手紙4章8節）という聖書から取られたモットーは本大学のよって立つ基盤を明確に示しています。

私学の危機が叫ばれ、生き残りの施策が追求され、時代に迎合するような動きが強まる中で、わたしたちは真の教養を身につけ、「キリストの心持」を持った学生を育てて世界に送り出したいと願っています。初代学長新渡戸は国連に転出したため短くして第二代の安井てつに後を託したのですが、その時こう語ったと伝えられています。

「この大学をただの学校にしてはなりません。形式に流れ、知識の詰め込みに力を注ぐのではなく、キリスト教の精神に基づいて個性を重んじ、世のため国のために尽くす人間を育てるように」。そして彼は、知識よりも見識を、学問よりも人格を尊び、人材よりも人物の養成を、と教えたのでした。これは実にすぐれた、深い洞察に富んだ言葉だと思います。

大学は単に知識や技術を身につけるためのインスティテュートではなく、すぐれた深味のある人間の形成というユニバーシティーの本来の目標を大切にしたいと願っています。

第二の点に関しては、学内の意見を充分に聞き、しかるべき機関で検討して方向を打ち出すと共に、勇気をもって転換期にふさわしい新しい歩みを歩み出したいと願っています。

東京女子大学は幸いなことに、優秀な教授陣、有能で献身的な職員、真面目で向学心に富む学生に恵まれていますから、アカデミズムの振興は先ず何よりも大切にしなければなりません。そして学問を究めると共に、思索の出来る学生、高い倫理性を身につけ正しい判断のできる学生を、この時代の中で育てたいと願っています。

創立80周年を機会に、文理学部と現代文化学部という二つの学部を一つのキャンパスに統合し、新図書館、学生ホール、教室棟、研究棟などを新築して新しい歩みを始めました。それぞれに歴史があり、伝統があり、気風がありますから、共に歩むためには努力して乗り越えねばならない多くの課題があります。それぞれの良きものを尊重しながら、東京女子大学の目指す教育という一点において真の融和を図りたいと考えています。

この統合に伴い、今迄、現代文化学部のあった牟礼のキャンパスが残りましたから、その跡地利用はわたしたちにゆだねられた希望ある課題だと思います。生涯学習のためのすぐれたモデルを作りたいという夢を持って、学内外の力と同窓生の協力を得て新しい委員会を発足させ、企画を急いでいます。東京女子大学の持つ力を結集して、女性の社会進出と役割が要請される中で、卒業生たちの学習継続の場として、また社会に開かれた生涯学習の場として活用したいと願っています。緑に囲まれた落着いたキャンパスは、そのために最適の場だと思っています。

国際化もこの大学の取り組まねばならない重要な課題です。特にアジアの女性のために良き研究と教育の機会を備え、内容あるプログラムを提供したいものです。国連やそれに関連する事業に従事することによって、世界平和に貢献する人物を育てたいという夢を画いています。

わたしは東京女子大学が、真実に学生を大切にする大学でありたいと切望しています。教育は本来、一人ひとりの人間を大切にする営みですから、個の確立した人間形成は本学の目指すところです。画一化ではなく、それぞれの特色を活かしながら、大学としての一致・前進を計り、世界に貢献したいものです。

臨定の恒定化を機会に、理系の新学科を増設し、時代に応える教育を進めると共に、哲学科から数理学科までの幅広いコースを持つ文理学部と新しい時代に対応するコースを持つ現代文化学部のダイナミックな調和を計りながら前進したいと願っています。

出席者（五十音順・敬称略）
有山　正孝（電気通信大学学長）
大橋　秀雄（工学院大学学長）
鈴木　　邁（千葉大学名誉教授）
司会
佐野　博敏（大学セミナー・ハウス理事長・館長／大妻女子大学教授）

座談会（平成11年6月22日）

国際的に通用するエンジニアの育成とは
――ＪＡＢＥＥを考える――

佐野　本日は先生方にＪＡＢＥＥ（日本技術者教育認定機構）についてお話しいただくということで、お忙しい中をお集まりいただきました。

このところ新聞でも何かとＪＡＢＥＥのことが取り上げられますし、日本の大学もいろいろな問題を解決しなければならないところにさしかかっているということでしょうが、その辺のアウトラインについて、大橋先生の方から口火を切っていただけますでしょうか。

国際的な認定の必要に迫られて

大橋　ＪＡＢＥＥは最近いろいろな新聞に取り上げられるようになってきて、大分皆さん方に知られるようになってきました。先ず、どうしてこのようなことが問題になってきたかについて申し上げます。工学教育の分野では、十数年前から、日本の高等教育は国際競争力がない、国際整合性がないと指摘され続けてきました。一九九一年の東西冷戦体制の崩壊を機にグローバリゼーションが急激に進み、日本が孤立しては生きられないということが一層明白になってきました。そこで「我々の教育をどう変えるべきか」の問題が切迫した課題として浮上してきたわけです。

スタート時点で私が一番強く感じていたのはやはり国際整合性です。日本の学生が日本の企業に就職するだけなら余り気に懸かりませんが、グローバルに考えると日本で工学系の教育を終えた者には何の品質保証もありません。このままでは、殊に留学生にとっては日本に留学する魅力が殆どなくなってしまうという危機を感じます。また、最近国際企業の人事担当者から直接聞いた話ですが、日本の工学部卒と欧米の工学部卒の新入社員に実際に仕事を与えて較べてみると、欧米の方が自主的に仕事をこなしてゆく問題解決力が2、3倍高い、だから初任給にもそれ相応の差があっていい、人材は別に日本から補給しなくても世界各地から集めればいい、などと言われてしまいました。企業からも低く評価されるような卒業生を出すのは教育する側の責任だということを痛感し、実力の点において国際競争力のある卒業生を出すことが待ったなしの状況になってきたと思っております。

我々はこれまで、外国の「engineering education」と日本の「工学教育」は同じものと思ってきました。日本の大学では「工学教育」として「工学の基礎となっている科学」、すなわち「engineering science」を教えていればいいというようになっていて、それをどう良くするかということばかり議論してきました。しかし、実は英語の「engineering education」というのはengineeringに携わる人、つまりengineerを育てる教育なのです。知識だけでは仕事はできません。知識を詰め込むだけではなく、それを実際に応用するトレーニングまでセットにして教育しなければengineering educationになりません。そういうセットの中には、例えば倫理の問題も当然含まれるわけです。そのような考えで向こうは教育しているのに対し、日本では学問だけを教えている。そしてこれまで日本では、素材としての卒業生を企業に送り届けたら企業が戦力のある技術者に育ててくれるということで、大学は学問だけ教えていればいいと考えてきました。しかし、我々はそれが根本的な誤りで、自立した技術者の育成を工学系高等教育のターゲットにしなければならないことに気付きました。敢えて「工学教育認定機構」と呼ばずに「技術者教育認定機構」にしたのはその辺の理由もあるからです。

佐野　大橋先生は従来の伝統的な工学の内容だけではなく、広く環境問題や倫理性など、技術者としての自覚を養うために、従来とは違ったかなり広い分野を学ぶことが必要だというふうに仰いましたが、感性工学をなさっていらっしゃる鈴木先生からご覧になるといかがでしょうか。

鈴木　従来は大橋先生が仰ったように、「engineering」を「工学」と訳しておりますが、人間の有する感性的な面での教育は行なわれていなかったと思います。全国一律的な考え方で、どこの大学でもengineeringというと特徴がない同じような工学基礎教育的なことがされていて、技術の方に伸びていかないという感じがしておりました。私は千葉大学のデザイン工学に所属しており、比較的に人間感性を重視する学科におりました。日本学術会議では材料工学研究連絡委員会の専門委員の一人でした。そこに参加した時に、人間を中心にすえた工学という考え方を入れる必要があるのではないかということになりました。そこで工学全般にわたってパラダイムの変換をはかるべきだとする意見がその頃から出始めたのです。前々から、感性的なものを入れるなどということは、自然科学を基礎にした工学体系を乱すようなものであるという考え方もあり、今でもかなりそう考えている先生方もいらっしゃると思います。それにも拘わらず、最近は非常に感性的な取り組みの仕方を、機械や情報の分野でもされたり、シンポジウムを開催されているというようなことを聞きまして その変化に驚いているところです。このように、大分様子が変わってきたという時に、ＪＡＢＥＥの問題が並行して出てきたわけです。

大橋先生がengineeringを「工学」と訳さずに「技術」と主張されたことにつきまして、私もなるほどなと思いました。新しい考え方で展開する必要があるのだと思います。

最後に、国際競争力がないという点ですが、仰るとおり日本だけなら余り問題がないのかも知れませんが、これから海外に出て仕事をしようとする卒業生達には当然のことながら資格問題が出てくるわけです。その時に日本の若者達が不利にならないようにするというのが一つ。もう一つは、海外から日本に留学する学生達の問題があります。今から10年前だったでしょうか、文部省の依頼でシンガポール、インドネシア、タイ等の各国の留学状況を視察した時、向こうの文部省に相当する教育省で、ディスカッションをしました。その時、「日本に行っても何の資格も得られないのではないか」と言われました。「いや、そんなことはない。工学士とか、マスターがあり、ドクターの制度があるんだ」と答えたところ、「それはインターナショナルじゃない」と言われ、「他の国に行けば資格を貰って帰ってこられるのに、日本にはそういう資格が一切ないので行く魅力がない。国際競争力の面では必ずしも日本の教育は充当されていないのではないか」と言われてしまいました。私はアジア地区では日本が一番実力を持っているのではないかと思っています。ですから、今後は海外からのプロポーズがあって、日本も一緒に国際協力の一端を担うような話が出てくるでしょうから、いわゆる工学というよりも技術とすべきであるとするＪＡＢＥＥの考え方を進めるというのはすばらしいことだと思います。

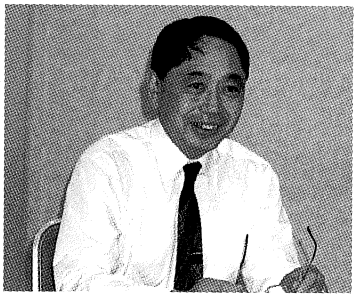
有山　日本の工業教育は、歴史的に見ると明治以来ある時期までは非常に成功していて、国際的競争力も持っていたと言ってよいと思います。しかし近年、状況が変わり、また国際関係も変わってグローバリゼーションの時代になってきました。グローバルな契約社会ということになると、このようなスタンダードがないと国際競争力を保っていけないのだろうと思います。いま鈴木先生が留学生の問題をご指摘になりましたけれど、私も数年前に文部省の留学生政策懇談会のお手伝いをしたことがあります。例の留学生10万人計画が5万数千人のところで伸び悩んだ理由をいろいろ分析してみたのですが、日本では入国が難しいとか、入学試験のシステムが国外の留学希望者にとって不具合であるとか、日本語が難しい等、阻害要因はいろいろ考えられるわけですが、要はそれらのバリアを乗り越えてでも日本に来るだけの魅力があれば留学しようという人は増える筈で、ちょっとしたバリアがあるから来ないというのは決定的な魅力がないからです。魅力のない一つの理由は、ただ今ご指摘のあったように国際的に通用する資格が得られないところにもあろうかと思います。以前のように、開発途上国の人が先端技術を吸収して帰ればよい、というのでは通用しなくなってきていて、しかもそういう状況の変化は我々の考えているより遥かに速いということではないでしょうか。

佐野　国際化に共通する基準の必要性。もう一つは工学あるいは技術関係の特殊性と、その分野における日本の学生の勉強の仕方や大学の教育のあり方への反省もあってＪＡＢＥＥが発足することになったのですね。この辺のところをもう少し具体的にお話しいただけますでしょうか。

大橋　今までの日本の工学教育は、いささか厳しい表現かも知れませんが「地域限定素材産業」だったと思います。「地域限定」とは日本の企業を顧客にしていること、「素材産業」とは企業に素材としての人材を供給することです。要するに大学では知識だけ詰め込んでおいて、企業はその学生を採用してから中で力が発揮できるような人間に育てる。これは戦後になってはっきりしてきた分業体制ですが、そういう分業体制にぴったり合うように大学は教育してきました。そうすると、企業は素材としての良さ、資質だけを問題にするわけですから、当然大学で何を勉強したかというよりも、どういう偏差値の大学に入ったかということを問題にします。そういう分業体制ができあがってきて、それなりに戦後の日本を支えてきたのですが、ここにきて企業自身がそういう産学の役割分担を放棄し、やはり外国の大学がやっているように、未熟といえども自立した技術者としての自覚を持つ人を育ててくれと言い始めました。

それと同時に最近は、一流企業を含めて、3年以内に新規

◀大橋　秀雄氏



◀有山　正孝氏

採用者の3分の1が辞めていくそうです。リクルート費用に莫大なお金をかけて採用し、研修が終わってやっと一人前に働けるようになったかと思うと「私が考えていた仕事とは違う」とか、「こんな仕事をずっと続ける気はない」と言って3分の1が辞めていく。就職する段階から、会社の知名度に惹かれるだけでなく、自分は何の仕事をやるために入るのかということをきちんと自覚した者をよこしてくれと企業側が要求し始めました。このように企業が変わってきているわけですから、我々もそれに応えたいと思っています。

私がJABEEを発足させようと努力した理由は、日本の工学教育の国際競争力を高めたいというのが原動力だったのですが、日本学術会議の会長であると同時に日本工学教育協会の会長でもある吉川弘之先生がこの運動のリーダーシップを取られてから、もう一つの柱が加わりました。吉川先生は「人工物」という概念を提唱され、これを広めた方です。大変ユニークな発想で、吉川先生は先ず「現代社会は何か」という問いかけから始めて、現代社会の特色は、人工物に囲まれて生きていることだと表現されました。人工物とは、人工的に作り上げた物でもあるしシステムでもあるわけです。建物はもちろん人工物で、我々は建物の安全性をある程度信頼して、地震が来ても大丈夫だと思ってこのビルの中で対談しているわけです。橋を渡っていても、自動車に乗っていても、全て人工物に生命安全を担わせている時代、それが現代であります。

では、その人工物に関わるものは誰かというと、開発からメンテナンスに至るまで技術者がこれに当たるわけです。技術者が現代社会に果たす役割と責任は昔と格段に違う、というのが吉川先生の出発点なのです。大学というものは13世紀、イタリアを中心として高度なプロフェッショナルを育成する場として誕生しました。当時の高度なプロフェッショナルとは、聖職者、医者、司法者でした。我々は病気になったら生命を医者に委ねますけれども、それと同様に我々は知らず知らずのうちに技術者が作り出す人工物に生命と安全を委ねているわけです。技術者は社会に対する十分な責任と自覚を持った者でなくてはならない。吉川先生がJABEEのキャップを引き受けて下さった動機はそれであり、それを実現するためには社会に技術者の役割を認知させることから始めて、技術者に相応しい資格制度を整備しなければなりません。ワープロ1級2級とかいう技能資格と、医師の免許とか司法試験を通って裁判官あるいは弁護士になる資格、つまりプロフェッショナルとしての専門職資格とは本質的に別で、我々は技術者をプロフェッショナルに高めたいと考えています。そうするためには教育から始めて一貫したシステムを作らなければなりません。先ず基本的には基礎高等教育を修了して、社会に出てから実地の経験を積ませ、そして資格試験をする。技術者の場合は教育が終わってから少なくとも5年程度の経験を積ませて、それから試験を受け、プロフェッショナルエンジニアとしての資格を取らせます。そして能力が陳腐にならないように継続教育を義務付けます。そういう一貫したシステムによって技術者が社会に果たす責任をきちんと守れるようにしたい。そのシステムのスタートポイントが教育であるということで、JABEEを始めようということになったわけです。

私は吉川先生にリーダーを引き受けていただいて本当に良かったと思っております。要するに二本柱ができたということです。私みたいに国際整合性とか国際競争力ばかり叫んでいると、なんだアメリカの真似ばかりしているとか、日本には日本独自の生き方があるという批判が出てきます。吉川先生がもう一本の柱をきちっと立てて下さるので、この二本柱をJABEEの屋台骨にしたいと思ってやっています。

評価と認定の違い

佐野　今のJABEEの定義ですけれど、卒業生の学生の資格というよりは、教育機関を認定するということですか。

大橋　教育プログラムを認定するということです。プログラムを認定しますけれども、その認定したプログラムを終了するということは学士を取得するということで、その学士を出すのは教育機関です。そういう意味で機関を無視するわけにはゆきませんが、我々が実際に認定しようとするものは技術者育成を目的とするプログラムです。ですから農業土木、農業機械などの農業技術者や医療技術者なども認定の対象となり、工学系教育機関に限定されません。

化学の扱いには難しいところがあります。ケミストをエンジニアと呼ぶと、違うという方が沢山います。アーキテクトをエンジニアと呼ぶと、ムッとする方が多いのに似ています。しかし、例えば理学部の化学を卒業された方も、かなりの方が技術に関わる仕事をしていらっしゃいます。今般JABEEに対して、日本化学会と化学工学会が一体となって対応したいと表明しておられることは、私は大変先見性があると敬服しています。物理にも似たところがあり、応用物理などはまさしくエンジニアリングであって、応用物理学会はJABEEに極めて熱心に対応しています。ですから理学部卒業生であっても、我々が求めている基準を充たす技術者教育プログラムを修了すれば、当然認定の対象になるというスタンスであります。

佐野　ちょうど似ているのはISOですね。企業がISOの認定を受けていればその企業の作った製品が国際的にも非常に信頼性が高い。教育機関も、国際的に通用する教育かどうか、それから環境を含めて社会に責任を持つという体制を教育の中に織り込んだところかどうかというプログラムを認定するということですね。

大橋　大学教育の品質保証とは何事だと叱られるかもしれませんが、結局はそういうことです。品質管理に関わる世界標準ISOの教育版だといういう感じがします。

有山　いま大学基準協会とか大学審議会答申の第三者評価機関というお話が出ていますが、それとこのJABEEとの関係をお話し願いたいのですが。

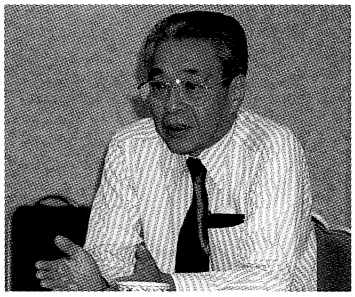
大橋　先ず、評価と認定とは違います。評価というのは、0点から100点まで評価できるわけですけれど、認定というのはある基準を設けて、それをクリアーしないものにはノーと言います。ノーと言うか言わないかということが極めて大きいファクターなのです。我々が現在持っている評価システムの中でノーと言えるものは何かというと、先ず大学設置審査です。あれは文部大臣がイエス・ノーというわけで、大臣がそれを判断する根拠を設置審議会がレポートする仕組みになっています。あれがノーと言ったら学部、学科はできません。我々はそんな立派な認定を持っているのですが、あれを国際的に通用する認定システムと主張しにくいのは、教育機関の初期品質だけを保証していて継続保証をしていないということです。

継続的に教育の質を確保するために、文部省は一応問題のある大学に視学委員を派遣してチェックして必要な勧告をすることになっています。しかし、問題があるところばかり見ていると視学委員の視点がどんどん下がってしまうので、必ず模範的な大学も含めて見るようにしています。視察の対象に選ばれるのは、余程いいのか相当問題があるのか、どちらかなのでしょう。それから、いろいろ改善勧告は出しますけれど、こんなひどい大学は廃止してしまえとは言えない。ですから、視学委員の制度があるにもかかわらず、わが国は継続的に教育機関の品質を保証するシステムを持っていると国際的に納得させるには難しいところがあります。

先ほどの設置審議会は官の組織ですが、もう一つの大学基準協会というのは大学が自分たちで作った民間組織です。大学基準協会の維持会員になるためには加盟審査というのがあり、入れて貰うときに品質基準を満たしているかチェックされます。ですから加盟を許されたということは一つの機関認定を受けたということになると思います。最近ではそれに加えて相互評価というものが始まりました。相互評価を申請する大学の自己点検・自己評価の結果を見ながら、違う大学の先生方から成る評価委員会が批判するところは批判し、改善を求めるところは改善を求めてレポートを出すわけですが、ノーと言わない評価なのです。しかし、大学基準協会はいろいろな勧告を出して改善して貰うから認定と同じだと言っていますが、国際的にはやはり、システムがきちんとノーと言えることになっていなければ認定したとは言えません。現在設立が計画されている文部省の第三者評価機関も認定機関ではなく評価機関です。

このように、評価か認定かということを考えてみると、継続的に品質を保証するという意味での認定システムを日本は持っていないと言えます。また我々がやろうとしていることは、技術者を育てる基礎教育として十分なプログラムかどうかの認定をするものですから、そのようなプログラム認定は日本に一つもなかったので、我々は重複した仕事をやっているとは考えていません。確かにプログラム認定と機関認定とで、教員の数や実験設備が充分かといった部分で重なるところがありますので、そういう重なった部分はプログラム認定の項目からどんどんはずしてしまえばいい。認定を受ける側が無駄な仕事をせず必要なことだけをやれば良いようにして、今まで全くなかったプログラム認定という役割をJABEEが果たそうとしています。それも技術者教育という枠内

◀鈴木　邁氏



◀佐野　博敏氏

だけでの話です。将来は同じような動きがいろいろな分野からで出てくるのが当然だと思うのですが。

佐野　大橋先生が仰ったように、それも評価であって認定ではないということになるかも知れませんが、今国立大学ではいろいろな外部評価委員会が設けられてしばしば外部の者として評価をさせられますが、特に工学関係ではいかがですか。

有山　外部評価をお願いしても、大学全体とか学部を対象とすると、個々の学科の教育プログラムを詳細に評価していただくところまでは及ばない場合があるので、学科毎に行なえばかなり具体的なコメントをいただけるのではないかと思います。しかし、それが強制力を持たないので、ただやっただけに終わってしまうのでは問題です。

大橋　私も大学に呼ばれて外部評価委員になることがよくありますが、例えばあなたの学科にはこれがないからけしからんという言い方はできません。教育を決めるのは外部評価委員ではなく大学自身ですから。外部評価委員はあくまでコメント役で強制力は何もないのです。

認定の基準と内容は

佐野　評価にしろ認定にしろ総論はそうしなければ他の国に追いつけないということで賛成せざるを得ないと思いますが、各論としてうまくいくかどうか認定の具体的な中身についてお話しいただきたいのですが。

大橋　技術者の基礎教育としてこれが必要だという基準を示して、その基準を各々の大学や学科が実現に向け努力するわけですが、最終的にJABEEが評価委員を派遣し、本当にその基準が充たされているということを認定するわけです。JABEEの基準は学科などにかかわらない「共通基準」と、専門によって違う「分野別基準」の二本立てになっています。「共通基準」はかなり抽象的に示されていますが、次のようなものです。

a「人類の幸福・福祉とは何かについて考える能力と素養」。これは教養教育に含めることもできます。職業を越えて人間としてジェネラルに必要な教養を身に付けなければならないという考え方もありますが、我々は技術者というプロを育てるための教養も必要だということで、教養は技術者教育の不可欠な一部分であるという認識に立っています。我々の考えに対して、いわゆる教養教育というものが初めて地についた役割を果たすことができると賛成して下さる方と、人間としてのジェネラルな教養でなくては駄目だと反発する方とがいらっしゃいます。これ自身一つの問題を投げかけているのではないかと思っています。

b「工学的解決法の社会および地球環境に及ぼす効果、価値に関する理解力や責任など技術者として社会に対する責任を自覚する能力」。これは技術者倫理を通じて実現されるものです。

c「理論的な記述力、口頭発表力、討論などのコミュニケーション能力」。今までコミュニケーション能力は卒論などを通じて自分で身につけるものだと言われてきましたが、そうではなく教育を通じて組織的に強化する必要があります。

d「数学、自然科学及び工学知識を応用できる能力」。ここで初めて当然出てくるものが出てきたわけです。ただ「応用できる能力」とありますので、知識を頭に詰め込むだけではない。例えば、セメスター、あるいは3学期、4学期制を導入して集中的に勉強して理解を高めるというように、それぞれに工夫して貰いたいと思っております。

e「自己学習能力」。当たり前のことが出てくるのですが、勉強するというのは、自分で資料を探して自分で調べるというのではなくて、誰かがしゃべって教えてくれるものだと思い込んでいる学生が増えています。社会でぶつかる問題の解き方は誰も教えてくれないわけですから、やはり自分で本を読み、自分で勉強するという自己学習能力を相当意識的に強化する必要があります。

f「種々の科学・技術を利用して社会のニーズを解決するためのデザイン能力」。

g「与えられた条件下で計画的に仕事を進める管理能力」。

以上、共通基準を紹介しましたが、これをどのようにプログラムの中で実現するかはそれぞれの学科にお任せします。例えばbの「技術者倫理」については、そういう科目を作って一学期間講義をしても良いし、「設計教育」などの中で、「君の設計したものが限界荷重を越えて使われたら、どういう結果になるか考えて見なさい」というような形で教育しても良い。どんな形でも良いのですが、ただ技術者倫理をこういう形で教育していると、きちんと説明しなければなりません。

「共通基準」の他に「分野別基準」があります。これはまだ具体化しておりませんが、はっきりしているのは、教育の自主性を奪わないよう、こと細かく決めるのではなく1ページ以内に収まる簡潔な基準になるということです。その分野の基礎など、どうしても知っておかなければならないエッセンスだけをキープして、あとは自由にまかせるという形でやろうとするものです。「分野別基準」の作成につきましては、その分野を取りまとめる学会の熱意によってずいぶん足並みに差があります。今年の10月にはJABEEをスタートさせたいので、我々は先にきちんと分野別基準を設定した専門から試行をスタートさせたいと思っています。

佐野　「共通基準」のところでお触れになった教養のあり方についてご意見を伺いたいと思います。おそらく工学以外の分野ではまだそこまで考えていないことだと思われます。JABEEでは工学なら工学、理学なら理学の学を通して社会にどう貢献するか、人類にどう貢献するかということが教養につながる共通基準であるというお考えですが、大橋先生もご指摘のように、全くそういう目的を度外視したものが本来の教養であるというふうなお考えの方もあろうかと思うのです。その辺のところで特に感性工学の発展のためには、目的意識を持った教養の方がいいのか、あるいは漠然として、目的意識を持たない教養の方が遠回りでもいいのだとか、その辺のところはいかがですか。

鈴木　工業系の教養教育は、例えば電気なら電気の基礎的な教養を教えるのが望ましいというようなことが良く言われていました。しかし私はそうではないのではないかと思うのです。私は教養の一般的なあり方というのは、当人の創造性の開発とか倫理の問題とか、環境の問題についてどういうふうに考えているのかとか、人間としての最低の、大学を出るための必要条件を学ばせるところだと思っています。ですから、私が千葉大にいた頃も、何でシェイクスピアの本なんかを英語で読ませるのか、読ませたって工学的には何の足しにもならないという考えを持つ先生もおりました。教養の廃止を伴なう改革が行なわれ、各デパートメントに教養の教官が配属された時に教養の先生達に、我々は今までのような教養教育は望みませんよ、というようなことを強く主張される先生もおられました。しかし本来の教養のあり方というのは違うと思うのです。旧制高校の、ああいう教育の仕方が本来的な教育のあり方ではないかと私は思っています。今は昔の学生と違って勉強はしないし、大学に入ればこれで自分の目的は達成したとばかりに遊びほうけている学生が多いとか、そういう時に旧制高校の理念なんて言ったってしょうがない、手取り足取りで教えていかないと今の学生は駄目なのだみたいな感じが現状じゃないかと思うのですけれど。しかし、私は教える方までが非常に矮小化されたような教養教育を考えていくのではなく、専門の先生は広い視野立って専門教育をすべきではないかと思います。吉川先生が仰った人工物工学の在り方の基本的な考え方の基盤は正にそこにあるのではないかと思っているのです。吉川先生のお話を聞いていると確かに今の工学体系のあり方というのをみんなで変えていく必要があると思います。このJABEEが設立されるという構想の中にはそれも含まれているような気がするのです。先ほど「分野別基準」がはっきりしないと仰った、その辺のところが一番問題になってくるのではないかと思います。有山先生も仰った明治以来の工学教育が成功してきたということは私も賛成ですが、最終的には必ずしも大成功とは言えない。有名大学を出た人たちによる経済の破綻や環境の破壊などの問題が起こっているからです。したがって、昔の教育には何か欠陥があったのではないか、倫理面が欠落していたのではないか等の反省が生じてくる訳です。それならそこに新しい考え方を入れなければならない。ですから私はやはりそういうところを皆で議論する機会をJABEEが与えてくれるのではないかと思うのです。「分野別基準」になれば特にそういう話が出てくると思います。

大橋　分野別基準で、技術者教育をいくつの分野に分けていくかということは一番難しい問題だと思います。東大の工学研究科長の中島尚正先生から「自分のところは細かく分けないで工学部一本でいきたい」という趣旨の手紙をいただきました。我々としては、本当にそれをやる気があるのでしたらどうぞおやり下さいということしか言えません。アメリカの各大学が、どういうプログラムで認定を受けているかを示すリストがあり、その中でMITは、全部で11のプログラムを認定されています。それに対して、もう少し小さい大学はエンジニアリング一本でやっているところもあります。名前はあまり知られていませんがカリフォルニアのハーベイ・マッ

ド・カレッジは、学部教育に特化している大学で、自分のところはエンジニアリングを細かく分ける必要はない、エンジニアリング学科一つだけでよい、どんなエンジニアリング分野でも将来強い力を発揮できる基礎学部教育をして、あとは大学院でもっと専門化してやればいいと言っています。そこもちゃんとエンジニアリングという分野で認定を受けています。ただ、そうするためには、それなりの教育をする覚悟をしなければならないと思いますね。

有山　そのハーベイ・マッド・カレッジはどれくらいの規模ですか。

大橋　学生総数は千人以下と比較的小さく、研究大学というよりも学部大学に特化して優秀な学生を研究大学に送り込むところです。アメリカの場合は競争が激しいから、日本のようにどこもかしこも研究大学だなんて言っていては生き残っていけない。自分の一番得意とする分野に特化しています。

鈴木　日本は右にならえで、大学の特徴など出ていませんものね。

教育制度の問題点は何か

有山　先ほど承りました「共通基準」の中のいくつかの項目は、今の日本の教育制度で欠落していたのではないかという気がします。例えばａとかｃは、大学に入ってきてからでは手遅れだと思います。最近の学生には、論理的な記述能力や言語能力の不足が甚だしいと思われる者がいますが、これは一体どこに問題があるのでしょうか。

大橋　国際同等性のスタンダードはどうしてもアングロサクソン系になりますから、アメリカ・イギリスの学力に合わせるということになります。我々は学部卒業の時点で国際同等性を確保しようとしているわけです。ところが文部省の初等中等教育の学習指導要領が変わって、ゆとりのある教育ということで学習内容を減らしてきました。大学の出口は国際比較から絶対値が決まっているので、入り口のレベルがどんどん下がってくると辛いのです。国際整合性を確保するというのは何も大学だけではなくて、小中高の各段階でそれぞれ確保して貰わないと、日本としては高等教育の同等性を確保できなくなる恐れがあります。

佐野　現在の教育環境の問題で一番大きい影響を受けている小中高の課程の認定もぜひ欲しいですよね。

有山　余談になりますが、1カ月程前にアメリカに行きまして、たまたま私の昔の学生の子供さんが入っている幼稚園のクラスに参加する機会があったのです。ところが幼稚園の子供が私たちに対して積極的にはっきり質問をするのですね。日本の幼稚園ではこういう事はあまり考えられません。このあたりから既に何か違うところがあるように感じました。

大橋　そういう意味では大学も非常に辛い。本来は中等教育で教わるべきことを大学で教えなければならなくなってきているわけです。入学定員を確保し、適正な志願倍率を維持したいと思うと、どうしても受験科目数を落としていく。その付けが回ってきて、機械を勉強するのに物理をやったことがないとか、医学部なのに生物を取っていない学生が沢山入ってきます。要するに我々の入学者に対するリクワイヤメントがはっきりしていないという付けが回ってきている。もしそれが避けられないなら、大学入学後半年から一年かけて導入教育だけをする。我々は相当思い切って教育を変えなければ現実に対応できませんね。

鈴木　文部省はゆとりのある教育の考え方によって初中等の教育で理数系のいろいろな課目を落としていって現在に至っている。先生が仰った大学に入ってからの基礎教育のやり直しは、今、私立大学ではどこでもやっていますよね。それによって教員の負担が非常に増えました。ゆとりのある教育が、大学ではゆとりの無い教育になってしまうわけです。その辺を学術会議や国大協を通して、大学における工学教育の現状を文部省に認識してもらうことが必要であると考えています。

大橋　少なくともＪＡＢＥＥについて言えば、文部省はその意味を認めて熱心にサポートしてくれています。それだけ危機感を持っているのだと思います。ＪＡＢＥＥの説明会を各地で開くと必ず文部省と通産省の担当者が参加して、我々を全面的にバックアップしてくれます。国でできないことを民の力でやろうとしているのですが、日本は民でやると、儲け仕事をしているのではないかと怪しげな目で見られるところがありますね。いつも文部省や通産省の担当の方が出てきてサポートして下さるのは大変有り難いと思います。

鈴木　このＪＡＢＥＥの問題は非常にグローバルな見方で対処しなければいけないとなると、それなりの処置を今から取っておかなければ間に合わないでしょうが、大学の先生達全部がそれを考えているわけではない。ごく僅かの先生方の集団が心配してそれをやっていらっしゃるというのが現状じゃないでしょうか。卒業生がＰＥの資格を取る、取らないというのは個人の問題に尽きる、そのために大学等で行なってきた自己評価などというものの上にまだ尾鰭を付けるような形になるならば、そうでなくても忙しい大学の教育研究にまた負担がかかり、そのようなことは止めてほしいと言う人がかなりいるようですけれど、大橋先生が仰ったように文部省や通産省が協力的だということになれば場面が違う展開をしていく可能性もありますね。

佐野　技術者が社会的な責任を負うと同様に、高等教育機関に勤めている教育者が社会的責任をどう負うかという問題があると思います。そこで、認定については先ほど仰ったように随分皺寄せがきて大学は辛いのですが、さしあたっては大学の入学試験がどう機能しているかというようなことや、入学後の一般的な教養についても、教養の先生の教えられることがどれだけ各学部教育を考えた上でのことなのか。あるいは専門の先生がどれだけ教養的なことを考えながら講義をされているか。そのウエイトは大学によって違うのは当然ですが、その辺の認定を個別にＪＡＢＥＥは行なわれるわけですね。

大橋　認定に合格することがどのくらい厳しいのかということが問題ですね。アメリカで技術者教育をやっている大学のリストを見ると、９割以上が認定されています。大学の外部評価と似たところがありますが、外部評価を受けるために学内で充分議論をして外部評価委員にそのレポートを示すという段階で、恐らく９割の改善効果は実現されているのです。改善効果は外部評価を受けるという準備の中にあります。ＪＡＢＥＥも同じで、認定を受けるという自己努力の中で９割方は教育改善効果が実現されていると思います。そして問題点があれば改善を指摘し、本当に間尺に合わないものがあったらノーと言う。その気にさえなれば教育は相当急激に変わってくるし、案外早く世界標準を超えたと威張って言えるようになると思うのです。

鈴木　確かにそういう見方もありますね。各大学が自己評価というのを誰も読めないくらいの分厚い本にしました。しかし、分厚い自己評価を文部省に出すまでにはそれなりに努力はしているわけですよね。出してしまうと後は何もしていないじゃないかと言う人もいますが、自己点検・自己評価をまとめたことで、かなりの進歩と改善が認められたと思います。一番大切なことは見直しを継続してゆくことにあると思います。

プロフェッショナリズムの定着をめざして

大橋　日本で戦後不足していたのがプロフェッショナリズムだと言われます。我々は学位という認識は持っていますが、学位に対応する職位の認識が希薄でした。職位の代表的なのは医師、弁護士、公認会計士などです。この学位と職位をきちんと差別して、その間に有機的連携をとっているのがアメリカやイギリスなどです。医者になるならそれに必要な医学の専門教育を修めなさいというわけで、学位と職位が繋がっています。一方、ヨーロッパ大陸、特にドイツでは伝統的に学位と職位が一体化しています。例えば工学系の大学を出るとディプロム・インジェニール（免許つき技術者）となる。これは修士と同等の学位なのですが、同時に一人前の技術者として扱われる職位ともなります。その代わり、昔は一年間、今は半年間の実習が必要で、卒業をする前にいろいろな国に行って経験を積んでいるのです。日本の大学教員の中には、日本も学位と職位が一体化していて、大学を出たら企業はちゃんと技術者として採用してくれると言う人がいますが、それは間違いです。採用後企業内で教育をして使えるようにしているだけで、企業は学生を最初から技術者として採用しているわけではありません。日本もアメリカやイギリスのように、学位と職位をきちんと際立たせたうえで有機的連携を取る必要があります。現在、日本には技術士という職位がありますが、これを取るのは大学に行かなくても試験に合格するだけでいいのです。それでは国際的に通用しません。高等教育も受けてない人が取れる資格との同等性は認められないと言われて門前払いです。日本の中できちんとしたプロフェッショナルな職位を作ろうと思うと、高等教育もそれに対応する形にしていかなければならない。その上できちんとした新しいジャパニーズ・プロフェッショナル・エンジニアという資格を作れば、もう世界中何処に行っても胸を張れるわけです。我々はそういう学位と職位をきちんと認識し、システムを一体化させるという構想のもとにＪＡＢＥＥを発足させようとしているわけです。日本の中でプロフェッショナリズムをもっと定着させて、それに相応しい社会システムを作り、教育をきちんとそれに連動させるということの第一歩だと思っております。日本はプロを軽視していますね、どうですか。

佐野　それは大学が軽視する傾向があったのではないでしょうか。

鈴木　職人という感じで見るのではないでしょうか。例えばＭＩＴに行って名刺交換をした時、ＰＥと書いてある。聞いてみたら工学部長とか学長になるにはＰＥの条件が必要だそうです。現在、卒業生のためにこういう資格制度の基盤づくりをしているわけですけれども、今度は逆に、大学の方に戻ってくる可能性、先生方が資格を取らなければならなくなる可能性があると思うのです。そうなれば本当の意味でのエンジニアリングの教育ができるようになってくるのではないかと思います。

大橋　アメリカ流で言えばエンジニアリング・エデュケーションというのは技術者を育てる大学教育なのだから、教える側もエンジニアとしての資格を持っているのは当然だということですね。

佐野　お話は尽きないようですが、そろそろこの辺りで終わらせていただきたいと存じます。この座談会によりまして、ＪＡＢＥＥが国際化の中に立たされている日本の技術者教育に果たす役割の大きさを改めて認識することができました。将来は工学や技術の分野だけでなく、教育のどの課程や分野でも検討が必要とされると思われますが、先生方にはお忙しい中を長時間お付き合いくださいましてありがとうございました。

（終了）

第17回大学院共同セミナー
カルチュラル・スタディーズとグローバリゼーション
――国民国家、「第三世界」、ディアスポラ

〔期日〕一九九九年10月22～24日（金～日の2泊3日）
〔場所〕大学セミナー・ハウス（八王子市下柚木）
〔対象〕大学院生、学部上級生、社会人

〔趣旨〕

●カルチュラル・スタディーズの「入門」から「実践」へ

カルチュラル・スタディーズは、文化をある本質的な、あらかじめ与えられた実体として想定するのではなく、特定の歴史や社会状況における構築物として捉える。そこで焦点となるのは、異なる権力関係のなかでいかに「文化」が「非文化」を排除し、「自己」が「他者」を周縁化して、二つのあいだに境界線を引いていくかの過程である。文化は言説上の差異を含み込んで構築されているので、交流や対話もさまざまな時点や場所での力関係に左右される。国境を越えた資本や労働力の動きがますます加速される時代に、階級や経済的不平等といった観点なしに、文化理論は構築不可能である。国民国家、国民経済、国民文化が、国境を越えた動きに比較して、現在衰退しているとしても、それは国民国家的価値観が滅びたということではない。ナショナルなものは、グローバルな資本や文化との再編された関係のなかで、いまだにローカルな効果が如実に発揮される場である。文化や資本が国境を越えるときも、その働きや効果は均一ではなく、矛盾に満ちている。よってカルチュラル・スタディーズも、ナショナルなものとグローバルな枠組みとの両方で問われなくてはならない。ポストコロニアルでポストナショナルな文化の流動性、混淆性を寿ぐ前に、コロニアルでナショナルな抑圧構造を問題にすべきなのもそのためである。

あるテクストがどのような場で生産され、どのような条件のもとで流通し、それを受容するのはどのような人々で、いかなる歴史の契機と関わり、どんな組織や言説の構造がそこには働いているのかに、カルチュラル・スタディーズは注目する。主体、国民国家、人種、民族などのアイデンティティをひとつの「真実」として構築するプロセスをカルチュラル・スタディーズは暴き出すのだ。しかし同時にカルチュラル・スタディーズは大学の内と外という広い社会的文化的コンテクストに根差しており、文化と知識を取りまく関係が、いかに発話の場の力関係と関係しているかにこだわる。誰が誰のために語る権力を持っているのか、それはどこで、どのような時に語られ、また何についての語りなのか？客観的な立場から真理の公正な探究が中立の空間で行われるなどということは有り得ない。かくして理論が常に「西洋」から輸入され、「東洋」はそれを実地に試す場であったり、東洋人は「ネイティヴ・インフォーマント」として理論的考察の材料を提供するという植民地的学問体系を問い直すことが重要な課題となるだろう。

昨年秋に行なわれた第16回大学院共同セミナー「カルチュラル・スタディーズ」が以上のような堤題に触れる「入門」であったとすれば、いよいよ今年からこのような思考法の「実践」に入りたい。もしあなたが自分の属する研究機関や社会において、何かを変えたいと思い、そのために自分の研究テーマが役立つと信じているとすれば、カルチュラル・スタディーズこそは、そのための言語と意見交流の機会を提供するだろう。そうした場のひとつとして、この三日間を使って頂きたいというのが、私たち運営委員の願いである。そのために今年は、国民国家、「第三世界」、ディアスポラをテーマとする三つの基調講演と、参加者の発表と討論によるテーマ別の分科会、それに全員が一つの題材について自由に討議するワークショップを設ける。多くの方が日頃の研究テーマを展開して、「上から」（教師から、西洋から）押しつけられる学問（ラーニング）ではなく、「下から」（学生から、私たちの時と状況から）解きほぐす再学習（アンラーニング）の契機を作り出してくれんことを。君たち自身が作る新しい批判的思考の潮流、それがカルチュラル・スタディーズなのだから。

〔運営委員〕

東京大学大学院総合文化研究科教授　小森陽一
東京都立大学人文学部助教授　本橋哲也
東京大学社会情報研究所助教授　吉見俊哉

お問い合わせ・お申し込みは企画室まで

TEL…0426―76―8532
FAX…0426―76―0266
E-mail：iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp

ホームページをご覧下さい

大学セミナー・ハウスはインターネットのホームページを開設しております。ハウスの歩み、交通案内図、出版物、施設使用料、教育プログラムの開催予告、ニュースなど、常に最新の情報をお届けする一方、ご意見やハウス主催のプログラムへの参加や書籍購入のお申し込みもいただけます。どうぞご覧下さい。

ホームページ：http://www.mesh.ne.jp/iush/

●お問い合わせは企画室まで

平成11年度 第1回常務理事会 '99年5月12日／アルカディア市ケ谷

【出席者】〈常務理事〉三宅彰、宇野重昭、中嶋嶺雄、絹川正吉、〈法人〉佐野博敏（理事長）、本江哲郎（専務理事）

●主な議事

評議員の候補者、千人会会員名簿の作成、割引制度など協議。

平成11年度 第2回常務理事会 '99年5月24日／アルカディア市ケ谷

【出席者】〈常務理事〉三宅彰、小山宙丸、宇野重昭、中嶋嶺雄、〈法人〉佐野博敏（理事長）、本江哲郎（専務理事）

●主な議事

理事・監事の評議員との兼任解消、評議員役員人事、平成10年度事業報告案、収支決算案など第95回理事会・第75回評議員会の議案の確認。

平成11年度 第95回理事会・第75回評議員会 '99年5月24日／アルカディア市ケ谷

【出席者（順不同）】

〈理事〉佐野博敏、本江哲郎、三宅彰、小山宙丸、宇野重昭、中嶋嶺雄、中川秀恭、岡野加穂留、〈評議員〉川原栄峰、井早康正、宮本美沙子、柳井道夫、櫻井毅

【委任状による者】理事・監事12名、評議員44名

佐野博敏理事長が議長となり、各議案について逐次提案の説明があり、それぞれ質疑応答・審議の結果、いずれも原案通り承認された。

◇評議員人事について

協力会員校の学長交替に伴う共立女子大学学長阿部謹也、上智大学学長ウイリアム・カリー、東洋英和女学院大学学長塚本哲也各氏の評議員新任と右記大学前学長の城塚登、大谷啓治、朝倉孝吉各氏の評議員退任。

協力会員校の加盟に伴う恵泉女学園大学学長荒井献氏の評議員新任。

協力会員校・準協力会員校の退会に伴う成城大学学長南博方、恵泉女学園短期大学学長大山綱夫各氏の退任。

◇役員人事について

協力会員校の学長交替に伴う東京都立大学総長荻上紘一氏の理事新任。同前総長山住正己氏の理事退任。

◇平成10年度事業報告案及び収支決算案について

主要な事項は次の通りである。①職員の構成については、昨年度の1月から業務課設営整備係を業務委託し、パートタイマー19人の所属を業者に移したことに伴い大幅減となった。②平成11年度の宿泊利用者は延べ三万八、二三三人で、平成9年度四万五九五人に比べ二、三六二人減となった。また、予算の基礎とした四万五千人を大幅に下回り、宿泊収入の予算額との比較で約二、三五六万円の収入減となった。長引く不況により利用者は非会員校が若干増えている以外は全般的に落ち込んでいる。③施設・設備の更新・修理費等については、約一、六五二万円を要したが、不測の事態がなかったこともあり、予算額に対して約三九三万円節約できた。固定資産の除却については、使用不可能なものを一括して除却した。④平成10年度決算書については、収支決算額の増減が大きいものを逐条的に説明し併せてグラフ（過去10年間の利用者推移、過去10年間の収支、一般会計収支・支出、次年度繰越額の推移）により近年における経営状況の推移等について補足して説明が加えられた。また、理事長から、寄付行為に逸脱しない範囲で何か新規事業の実施や利用方法の改善などにより収入増が見込めないか、いろいろ検討している旨の発言があった。なお、監事からは「平成10年度における会計及び業務とも適正に処理されている」旨の監査報告があった。

◇理事・監事の評議員との兼任解消について

平成11年5月24日から、当法人の役員（理事・監事）は評議員を兼任しないこととし、それぞれの構成を次のとおりとしたい旨の提案があり承認された。なお、理事会において新規に選任された評議員について報告があり、また、現在選出が遅れている大学職員研修プログラム委員長については、決定次第就任願うこととし、理事長に一任された。

〈理事〉（20名）（理事長・館長）佐野博敏、（専務理事）本江哲郎、（常務理事）小山宙丸、宇野重昭、中嶋嶺雄、絹川正吉、（理事）中川秀恭、天城勲、大橋英五、神谷健一、岡野加穂留、斉藤英四郎、佐野文一郎、蓮實重彦、石弘光、荻上紘一、鳥居泰彦、内藤喜之、奥島孝康、清成忠男

〈監事〉（2名）外間寛、梶井功

〈評議員〉（63名）（学識経験者）三宅彰、中村哲、川原栄峰、井早康正、○宇波彰、○平野健一郎、○宇佐美滋、○波多野重雄、（会員校代表）岡本靖正、鈴木章夫、有山正孝、佐藤保、板垣浩、北原保雄、磯野可一、兵藤釗、原島文雄、宮本美沙子、戸沢充則、國岡昭夫、梶原長雄、船本弘毅、堀川清司、大場建治、柳井道夫、志村尚子、片山仁、阿部謹也、小倉芳彦、加藤寛、中川徹子、大橋秀雄、小口泰平、松前達郎、松田藤四郎、雨宮眞也、森陽、日江井榮二郎、冲永荘一、長澤俊彦、小谷誠、本多健一、塚本哲也、高野邦彦、佐藤東洋士、出牛正彦、高橋茂、山田雅子、櫻井毅、ウィリアム・カリー、西川哲治、富塚文太郎、清水司、荒井献、水上忠、石井哲夫、○水島惠一、○松本浩之、（財界関係者）渡邉宏、大賀典雄、渡里杉一郎、岩佐凱実、平岩外四

（注）○印は、新規に選任された評議員。

◇その他

(1)千人会会員名簿の作成について

佐野理事長から、先に本江専務理事から報告があった、千人会の名簿について改訂する方向で検討しており、現在アンケートを取るべく作業を進めているが、アンケートの集計ができ次第名簿を作成したい旨の提案があり、種々検討の結果基本的に了承され、作成に当たっては理事長に一任することとした。

(2)評議員会の議長について

理事又は監事の評議員兼任解消後の評議員会議長については、佐野理事長から三宅彰氏を推薦したい旨の提案があり了承された。寄付行為第26条第2項により選出する議長に三宅彰氏が決まり、同評議員から就任の挨拶があった。

平成11年度 協力会員校事務連絡会 '99年5月7日（金）／10時～16時

主なプログラムは、次のとおり。

午前10時から開会し、佐野理事長の挨拶、本

江専務理事の概況の説明、本郷企画室長の教育プログラム等の案内及び池田業務課長の施設等の説明があり、引き続き全体協議が行なわれた。午後は、施設の案内、自己紹介等があり、懇親会が行なわれ、16時に閉会した。

（出席者）（19大学、23名）

石川岩男（桜美林）、岩田光夫（お茶の水女子）、田邊久夫（慶應義塾）、佐藤幸一（恵泉女学園）、中島則行、川上ひめ子、首藤務（国際基督教）、壬生康章（埼玉）、守谷香代美（芝浦工業）、伊藤瑞枝（白梅学園短期）、青野裕亮（成蹊）、工藤由紀枝（千葉）、中島久美子（中央）、高橋泉（筑波）、小林勉（電気通信）、水村直人（東京外国語）、西村俊雄、鈴木元（東京工科）、友常岳浩（東京電機）、駒野亮（東京農工）、足立睦夫（東洋英和女学院）、新地章倫（立教）、佐藤善志（大学職員研修プログラム委員）（敬称略）

平成11年度 第1回大学教員研修プログラム委員会 '99年4月9日／アイビー・ホール

【出席者】絹川正吉、佐々木一也、建部正義、中田良平、山内正平、田中義郎、耳塚寛明、安岡高志

【ハウス側】企画室スタッフ3名

●主な議事

平成10年度大学改革推進経費について、第18回大学教員研修プログラムの企画について、他

平成11年度大学教員研修プログラム委員

（就任順、○印は新任、敬称略）

〈委員長〉

絹川正吉　国際基督教大学学長（数学）

〈副委員長〉

井下　理　慶應義塾大学総合政策学部教授（社会心理学）

小林志郎　東京学芸大学副学長（演劇学）

〈委員〉

亀山純生　東京農工大学農学部教授（倫理学）

佐々木一也　立教大学文学部教授（哲学）

建部正義　中央大学大学院商学研究科委員長（金融論）

中田良平　電気通信大学電気通信学部教授（電気工学）

宮腰　賢　東京学芸大学教育学部教授（国語学）

山内正平　千葉大学園芸学部教授（文化史）

丹羽　泉　東京外国語大学外国語学部助教授（宗教社会学）

清水一彦　筑波大学教育学系教育制度研究室教授（高等教育）

○田中義郎　玉川大学文学部教授（比較高等教育）

○耳塚寛明　お茶の水女子大学文教育学部教授（教育社会学）

○安岡高志　東海大学理学部教授（化学）

平成11年度 第1回大学職員研修プログラム委員会 '99年4月27日／東京YMCA

【出席者】佐々木勝洋、新地章倫、田邊久夫、松本由紀子、森沢淳一、吉田久治

【ハウス側】佐野館長ほかハウス職員3名

●主な議事

第1回大学職員研修プログラムの企画、他

平成11年度大学職員研修プログラム委員

（敬称略）

〈委員長〉

田邊久夫　慶應義塾大学入学センター部長

〈委員〉

佐々木勝洋　上智大学学生部次長・学生生活課長

佐藤善志　学習院大学理学部事務長

新地章倫　立教大学総務部庶務課課長

松本由紀子　電気通信大学学生課主任

森沢淳一　東京工業大学厚生課厚生企画掛

吉田久治　聖心女子大学入試調査課課長

平成11年度 第2回大学教員研修プログラム委員会 '99年5月11日／アイビー・ホール

【出席者】絹川正吉、佐々木一也、建部正義、宮腰　賢、山内正平、丹羽　泉、田中義郎、耳塚寛明、安岡高志

【ハウス側】佐野館長ほか企画室スタッフ3名

●主な議事

平成11年度大学改革推進経費について、第18回大学教員研修プログラムの企画について、他

平成11年度 第1回共同セミナー委員会 '99年5月25日／アイビー・ホール

【出席者】宇波　彰、松井孝典、小森陽一、小松　弘、宮島　喬、村上陽一郎、市村禎二郎、谷川　渥、本橋哲也

【ハウス側】企画室スタッフ3名

●主な議事

平成11・12年度委員人事について、今年度セミナーの企画、他

平成11年共同セミナー委員

（就任順、○印は新任、敬称略）

〈委員長〉

宇波　彰　明治学院大学文学部教授（記号論・哲学）

〈副委員長〉

伊東孝之　早稲田大学政経学部教授（比較政治学）

伊藤正直　東京大学大学院経済学研究科教授（日本経済・金融論）

〈委員〉

野崎昭弘　大妻女子大学社会情報学部教授（情報科学）

松井孝典　東京大学大学院新領域創成科学研究科教授（比較惑星学）

小森陽一

東京大学大学院総合文化研究科教授(日本近代文学)
長谷川眞理子
専修大学法学部教授(行動生態学)
井上信子
日本女子大学人間社会学部助教授(発達心理学・臨床心理学)
小松　弘　早稲田大学文学部助教授(映画史)
宮島　喬　立教大学社会学部教授(社会学)
村上陽一郎
国際基督教大学教養学部教授(科学技術論)
山中速人
東京経済大学コミュニケーション学部教授(社会学)
吉見俊哉
東京大学社会情報研究所助教授(社会学)
市村禎二郎
東京工業大学大学院理工学研究科教授(物理化学)
桐原保法　ソニーサービス㈱代表取締役社長
○内海愛子
恵泉女学園大学人文学部教授(日本―アジア研究)
○谷川　渥
國學院大學文学部教授(美学・芸術学)
○本橋哲也
東京都立大学人文学部助教授(イギリス文学)

平成11年度国際プログラム委員

(就任順、○印は新任、敬称略)

〈委員長〉
宇佐美滋
日本大学国際関係学部教授(国際関係論)
〈副委員長〉
佐藤英夫
国連大学学長上級顧問(国際政治経済)
滝田賢治
中央大学法学部教授(アメリカ外交・国際政治史)
〈委員〉
天児　慧
青山学院大学国際政治経済学部教授(現代中国論)
上坂　昇
桜美林大学国際学部教授(アメリカ研究)
大芝　亮
一橋大学法学部教授(国際関係論)
勝俣　誠
明治学院大学国際学部教授(国際政治経済)
関場誓子
聖心女子大学文学部教授(国際政治)
大島美穂
津田塾大学学芸学部助教授(国際政治・北欧研究)
川勝平太
国際日本文化研究センター教授(比較経済史)
山本吉宣
東京大学教養学部教授(国際政治学)
渡邊啓貴
東京外国語大学外国語学部助教授(国際関係論)

平成11年度 第1回国際プログラム委員会 '99年6月18日／アイビー・ホール

【出席者】宇佐美滋、滝田賢治、上坂　昇、大芝　亮、勝俣　誠、関場誓子
【ハウス側】佐野館長、本江専務理事、企画室スタッフ2名
●主な議事
第25回国際学生セミナーの実施報告、第26回国際学生セミナーの企画について、他

平成10年度一般会計収支計算書

(平成10年4月1日～平成11年3月31日)　(単位：円)

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
基本財産運用収入	17,969	管理費	103,573,605
会員校会費収入	63,250,000	人件費	54,424,845
事業収入	139,725,021	施設管理費	37,991,009
施設改修協力金収入	6,617,100	一般管理費	11,157,751
セミナー会費収入	7,599,319	事業費	136,164,191
補助金等収入	5,524,580	人件費	69,376,874
寄付金収入	920,400	一般事業費	44,315,442
雑収入	6,497,790	普通セミナー事業費	13,077,807
繰入金収入	4,000,000	学生指導セミナー事業費	5,849,264
その他の収入	1,500,000	国際学生セミナー事業費	3,544,804
		固定資産取得費	3,605,700
		減価償却積立預金支出	25,000,000
当期収入合計(A)	235,652,179	当期支出合計(C)	268,343,496
前期繰越収支差額	100,127,393	当期収支差額(A)―(C)	-32,691,317
収入合計(B)	335,779,572	次期繰越収支差額(B)―(C)	67,436,076

(注) 消費税の処理は税抜き方式によっている。

平成10年度千人会会計収支計算書

(平成10年4月1日～平成11年3月31日)　(単位：円)

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
会費収入	3,045,000	印刷製本費	159,600
雑収入	75,433	通信運搬費	100,000
		払込手数料	40,680
		繰入金支出	4,000,000
当期収入合計(A)	3,120,433	当期支出合計(C)	4,300,280
前期繰越収支差額	26,781,851	当期収支差額(A)―(C)	-1,179,847
収入合計(B)	29,902,284	次期繰越収支差額(B)―(C)	25,602,004

(注) 消費税の処理は税込み方式によっている。

花ごよみ　セミナー・ハウス キャンパスの植物

ムラサキシキブ (別名：実ムラサキ)

夏の終わりに紫色の小さな実をたくさんつけますが、輝くその実は美しくまるで宝石のよう。この名がついた所以もこのあたりにあるのでは？実になる前の花は淡い桃色で小さく、あまり目立ちません。花が終わると緑色の実ができて、それがやがて紫色に変わります。花・実ともに茶花としてお茶席に飾られるそうですが、ハウスでは遠来荘(茅葺きの民家)の庭にあります。8月中旬に花が咲き、実が紫になるのは9月中旬頃です。是非お出かけください。

出版物のお知らせ

●お問い合わせご注文は企画室へ。
TEL：0426-76-8532
FAX：0426-76-0266
E-mail：iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp

第35回教員懇談会記録書

●'99年7月発行　定価一、〇〇〇円(税込)
(過去の記録書も販売いたしております)

大学改革を斬る

●'97年7月発行　定価二、〇〇〇円(税込)

大学力を創る：FDハンドブック

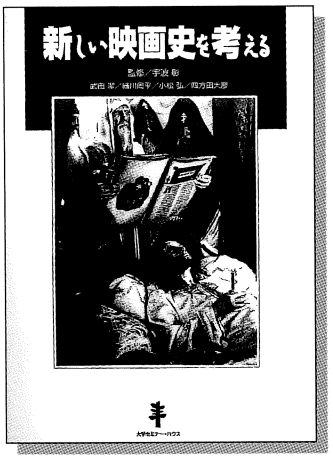
●'99年3月発行　定価二、〇〇〇円(税込)

執筆：絹川正吉／示村悦二郎／岡　宏子／原一雄／井下　理／宮腰　賢／山内正平／福田一郎／佐々木一也／建部正義／丹羽泉／中田良平／蝋山道雄／亀山純生／小林志郎／清水一彦
寄稿協力：野田一郎／森平爽一郎
学生の知の歓びへの起爆剤となる授業を！

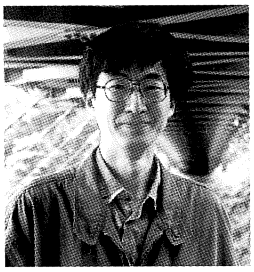
FDの中核は授業の改善だ！シラバス作成から成績評価まで、長年の授業体験に基づき練り上げられた、教員と学生の生き生きした相互交流を導き出す、授業現場の改善、教員の能力開発のための具体的な指針を満載する。

新しい映画史を考える

●'98年12月発行　定価一、五〇〇円(税込)



ひとこと



東京の砧緑地公園内にある世田谷美術館は家から車で30分くらいのところにある。環状8号と東名高速に隣接しているが、意外と静かだ。往来の激しい都市の喧騒から逃れ、時間はここで止まったようになる。芝生の石のベンチに腰掛け、そよ風に吹かれていると幸せな気持ちになる。

セミナー・ハウスも同じように緑が多く、起伏に富んだ地形で、四季それぞれ楽しめる。ここの自然が来館者の心を和ませ、また来たいなと思ってもらえたらとフロントにいる私は思う。

業務課・中島伸久

シジュウカラのその後

No.154の表紙でご紹介したシジュウカラは5月17日無事に巣立ち、親鳥から飛び方の指導を受けていました。今ごろは元気に飛び回っていることでしょう。写真は巣立ち直後の雛です。

寄贈図書

'99年4月～6月

『戦争と人間』　小島清文殿
『大学論』　日本エディタースクール出版部殿
『21世紀の国際コミュニケーション』　狩野良規殿
『スウェーデンの社会サービス法／LSS法』　加藤彰彦殿
『AJALT』No.22　国際日本語普及協会殿
『感性工学の枠組み』『第3回感性工学学術シンポジウム論文集』『日本感性工学会キックオフシンポジウム』　鈴木　邁殿
『東京人』7月号　海老沢信一殿

寄付

'99年4月～6月

<一般寄付>
一、〇〇〇円＝文教大学女子短期大学部　水田圭子殿

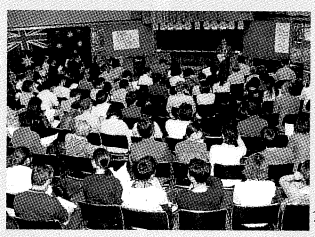
私の国際交流

20回を迎えた日豪合同セミナー

日豪合同セミナー・運営委員　廣田耕司

毎年６月の第１週末、ここ八王子の大学セミナー・ハウスで、いろいろな視点から日豪関係を考えようと、200人ほどが集まり、「日豪合同セミナー」を開いている。今年は６月５（土）、６（日）の２日間だったが、20回の節目を迎え、ピーター・グレー駐日オーストラリア大使が記念講演をし、同国の国花である「ミモザアカシア」の記念植樹を行った。また日曜日にはオーストラリア映画「ある老女の物語」を見、老人福祉を巡って掘り下げた討論を行うなど、大いに盛り上がった。

このセミナーは、77年11月、当時発足したばかりの日豪学術文化センターに集う在京の諸団体が力を合わせて、よき日豪関係を作り出す「草の根」の運動として開かれたのが始まりである。もっとも、それ以前にセミナー・ハウス主催の国際学生セミナーに出席したオーストラリアからの留学生により74年５月に日豪関係を考える２泊の合宿が行われており、ここでまかれた種を、日本側が継承し、育ててきたといえそうだ。



８回目の88年からは、セミナー・ハウスのご厚意で、６月第１週に定着した。ひと頃は400人を超える参加があったこともある。しかし分科会全部で10テーマ、各20人程度が適正規模なので、このところ200人前後に落ち着いている。講師はもちろん全員が無償ボランティアなのも、このセミナーの特色だ。九州や東北から毎年駆けつけて下さる方々も多い。

開催の準備は正月明け頃から始まる。その年強調すべきは何か、分科会のテーマはどうするか、日曜日の全体集会で話し合われる方向性など、大使館の方々、特派員経験者や若手の活動家、日豪学生交換連盟の学生などが徹底した討論を行う。その過程で魅力ある企画が練り上げられていく。そしてプログラムの発送、受付と、毎年新しい顔ぶれが加わるので手間のかかる作業が待ち受けている。大使館の協力を得て、主として学生が交代で電話番をして処理している。

合宿セミナーならではの行事として、夕食後のワインパーティーがある。東京農業大学のＯＢを中心とした男声合唱団「コールファーマー」の歌声に始まり、分科会では物足りないと議論をするグループや、一年一回の邂逅を楽しむ人たちなど、日頃は口にできないオーストラリア産のチーズとワインに舌鼓を打ちながら、歓談が続く。

だが問題がないわけではない。為替相場の変化で留学生がつましい生活を強いられるようになり、参加が減ってきていること。参加者の若返りがもう一つ進まないこと。しかし本当に魅力ある企画を立てさえすれば、こんな悩みも解消するだろう。現に今年は新規参加の学生の姿が目立った。緑に囲まれたセミナー・ハウスで、国際理解と連帯の一歩を踏み出した若者たちの将来に多くの期待を込めて、来年の再会を誓い合いながら解散した。これまで惜しみなく協力して下さったセミナー・ハウスのみなさんに感謝いたします。これからも暖かく見守っていただきたいと存じます。

新入生合宿に参加して

●私は大学のオリエンテーションで大学セミナー・ハウスに一泊した。セミナー・ハウスは豊かな自然にかこまれていて、まるで現実から抜け出したような気分になった。合宿が盛り上がりいいものだったのも、この自然によってみんなの気分が開放的になったということによるのかもしれない。私はできることなら帰らずにあと何泊かしていきたいとさえ感じた。

（中央大学心理学研究室・鮫島健太）

●住居は、人間にとって、重要な役割があると思います。昔、住居は雨や風などから身を守るために造られました。しかしそれだけなのでしょうか。私達は学校や会社から帰ると、家族と話したり、体を休めたりします。つまり住居というのは外の世界と自分の世界を分ける特別な空間だと思います。大学セミナー・ハウスに行って住居の意味が分かったような気がします。私の家の周辺は店がならんでいるので人工的な音しか感じませんでした。そのため、あまり家が好きではありません。しかしセミナー・ハウスに泊まって分かりました。周りは緑に囲まれ生き物の声や風の音を感じることができ、心が安まりました。つまり住居とは安らげる空間だと思います。その安らげる空間をデザインするため私達は二年間学びます。そして自分が求める空間を表現したいと思います。

（共栄学園短期大学住居学科・藤中理絵）

●私は最初、セミナーに行くことがとても面倒でした。どうしてこの時期に泊まりがけの研修なんかやるのだろうと思いましたが、いざ行ってみると研修という堅苦しい雰囲気ではなく、みんなと一日も早く仲良くなるための合宿みたいなものでとても楽しかったです。しかしディスカッションでのみんなの真面目な意見や、福祉に対する情熱などを聞き、改めて自分が将来どのように福祉に携わっていくかを考えさせられた二日間でした。

（日本女子大学社会福祉学科・加藤美季）

●初めは行こうかとても迷った。でも来てみてとてもよかった。一度にたくさんの先輩や友達と出会えたからだ。そして先輩はとてもやさしく、楽しく、この企画にとても一所懸命で尊敬した。友

達ともたくさん話をし、遊んで楽しいひとときを過ごせた。次会うのがとても楽しみだと思う。キャンプに来てよかった。心からそう思う。

（東京薬科大学・市川靖子）

●性格上自分から初めて会う人に声をかけることが苦手な僕にとってこのセミナー・ハウスでの一泊は絶好の機会でした。それに加えて、履修の事柄についていい情報が聞けたり、学科の教授の人達からどんな研究をしているのかなど今まで聞いてみたいと思っていたままだった事柄をいろいろと聞かせてもらうことができました。このセミナー・ハウスでの一泊のお陰で、今とても充実した大学生活を送っています。本当に参加して良かったです。

（東京都立大学応用化学科・穂谷野聡）

●入学してガイダンスづくめだったのにも拘わらず、さらに泊まってまでガイダンスをするか、という気持ちだった。しかし、実際に参加してみると今まで以上に内容の濃い単位修得や資格などの話を聞くことができたので、今後の役に立つと思った。また、交遊関係が決まっていない時の泊まりだったので不安だったが、これをきっかけに交流ができ深めることができた。まるで修学旅行のようで楽しい泊まりだった。参加して良かった。

（東海大学西洋史学専攻・村野太郎）

●一泊という中で多くの大切なことを得た。特に、「友達」との新たな関係だろう。普段話さない人との討論会での白熱した意見交換は自分にとり大きな刺激となった。また夜は、修学旅行のように語り合いお互いを再発見した。大学に入り、このような機会をもてるとは思わなかったので、良かった。皆と知り合い語り合う機会をこれからも持ち続けてほしい。

（日本女子大学教育学科・西尾友希）

●二日目の朝、私は思わず深呼吸をしてしまった。あんなに気持ちのいい朝は久しぶりだった。こんな大自然の中で、鳥の声を聞きながら目覚めるなんて何年ぶりだろう。前の晩は長い間友だちと語っていたはずなのに、妙に空気がすがすがしく思えた。セミナー・ハウスには、学校内での交流を深めるという大きな目的がある。私たちは広大な自然の中ですっかり心も大きく開けて、うちとけ合うにはそれほど時間がかからなかった。はじめに見た時は、あまりに質素な小屋に驚いていた私たちだったが、夜が来るころにはむしろそのめずらしい状況を楽しんでいた。普段の社会生活の中で常に持ち続けている緊張感が、この大自然の中で解放された。飾り気のない空間がとても心地良かった。ここの建造物のほとんどが個性的なデザインをしている。それら一つ一つに目を向けてみるのも、セミナー・ハウスの楽しみの一つではないだろうか。私はその形が何を訴えているのか、どんな意味が含まれているのかを考えながら、デザインの楽しさに感動していた。セミナー・ハウスでの二日間は、私たちにとって貴重な時間となった。一夜を共にした友人達とは、今でもこの日の話題が持ち上がる。同じ思い出を持っている私たちは、心から信頼できる大切な仲間となった。セミナー・ハウスで得た友人や感動は、きっとこれからの私たちの大きな財産になると思う。

（十文字学園女子短期大学家政学科・小針さゆり）

●入学して間もないころ、同じ学科の人との交流を深めるチャンスを与えてくれたのが、この合宿でした。そのおかげで今では同じ学科の人みんなと悩んだり、笑ったりと充実した日を毎日送っています。また、カリキュラムについての話を先輩方から聞くことができ、それまでに感じていた不安がこの合宿でなくなりました。今思えば本当にこの合宿に参加して良かったと思います。そしてこれから四年間、頑張りたいと思います。

（お茶の水女子大学理学部・小宮山晴香）

●いくつもの友情がここで芽生えまたは一層深まっていったのだろうか。グループトーク、食事会、ゲームなどを通して、様々な価値観や考えを持っている人達と触れ合い、今まで知らなかったことを知ることができた。そして国が違っていても、みんなひとつになって何かをし、その中でお互い学びあったり、信頼関係を築き上げることは、すばらしいことだなと思った。私は、ここで「国際交流の理想像」を見つけたのであった。

（慶應義塾大学国際センター・羅偉芬）

●初めてセミナーのことを聞いた時、私はあまり乗り気ではありませんでした。班ごとに集まっても、しんとしていて、会話もできませんでした。しかし、オリエンテーリングやクイズをやっていくうちにだいぶうちとけていき、夕食の時などはとても楽しく過ごせました。始めは嫌でしたが、時間がたつにつれて、セミナーに参加してとてもよかったと思っています。

（東京工科大学電子工学科・玉野有希）

●今回はセミナー合宿ということで、勉強ばかりかと思っていました。けれど着いてみれば、自然の中でのコミュニケーションといった感じでした。ネイティブスピーカーの方はとても良い人で、会話をしながら一緒に笑えたことが私の中では貴重な思い出となりました。また、今まであまり話をしたことのないクラスメイトのことも良く知ることができたので、よい機会をあたえて頂いたと思っています。

（文教大学女子短期大学部英語英文科・細川泰代）

●セミナー・ハウスは緑がいっぱいです。その自然の中で英語力が向上し、クラスメイトと仲よくなることができました。キャンプファイヤーは一番楽しい催しでした。スコティッシュ・ダンスで私は高校生のときのように無邪気に遊んで、楽しく過ごしました。キャンプファイヤーは皆と仲よくなる掛け橋となってくれました。夜空の下で踊ったあの日は忘れられないものになりました。

（文教大学女子短期大学部英語英文科・後藤由美子）

●偶然か、必然か。運命か、奇跡か。なるべくしてなる友人だったのかもしれない。しかし、「友人となる最短ルートに限りなく近いもの」の一例を、このセミナー・ハウスでの合宿が僕に提供してくれたことに疑うべき点はない。「友人は楽しみを倍にし、悲しみを半分にする」とは先人が説いた言葉ではあるが、合宿を通じて得た友人が今の自分の大学生活において、同様のことをしてくれることに感謝の念と誇りを持つ次第である。

（明治学院大学第二部社会学科・薄井勝久）

●セミナー・ハウスの豊かな自然の中で、これからの学生生活に対する展望について話し合った。話し合いに入った時は、なぜこの学校に入学してきたのか皆漠然としているようだった。しかし話し合ううちに、これからの学生生活において何をすべきか認識できたのではないかと思う。入学する前にあった目標が、入学と同時に薄れてしまうことが多いと思うが、セミナー・ハウスでの合宿で再び目的を持ち、学生生活を送れると思う。（東京都立短期大学経営情報学科第二部・外崎幸茂）

●大学に入ったらサークルに入らないと友達できないよ―高校の頃そう先輩に言われていたので、オリエンテーション合宿はどうなるんだろうととても不安でした。しかも、今年の新入生の数は、

クラスが十人と十二人しかいなく、コース全体でも二十二人。大学入学式のあのものすごい数の仲間の集団とのギャップに、もし友達ができなかったらどうしようかと、思わずにはいられませんでした。ところが、ふたをあけてみると、合宿委員の抜群の企画力と、開放的な自然、そしてちょっと奇抜な建物と、すべての要素があわさって、一生忘れられないような体験になりました。教授を交えてのディスカッションでは、普段話すことのない隣のクラスの友達の、意外な側面をかいま見ることができ、星を探しながら部屋に帰って、遅くなるまで「お互いのこと」だけでなく、ちょっとつっこんだ「お互いの教育観」、さらには将来のことまで話しました。普段、授業と授業の間だけでは話すことができないことです。合宿が終わった時、「たった二十二人」が「二十二人も」の仲間になりました。

（中央大学教育学研究室・藤川華子）

●四月十四日、十五日と八王子で行なわれたフレッシュマンキャンプでは、津田塾についてのクイズや、OGの方々を招いてのパネルディスカッションなどが催されました。なかでも初日と二日目の二度にわたって行なわれたセミナーごとの話し合いでは友人の意外な結婚観などを知ることができ、クラスのつながりが一層深まったように思いました。大変有意義な二日間でありました。

（津田塾大学英文学科・在塚洋子）

●二日間という限られた時間の中でどこまで本音で打ち解け合えるかが今回の課題でもあり最大の楽しみ方でもあったと思う。各セミナーごとの討論会は普段の生活では、余程心を許した友人同士でしか話さないようなことまで本気で語り合うことができ、とても貴重な体験ができたと思う。無事二日間過ごすことができ、貴重な体験をする機会を与えて下さったセミナー・ハウスの皆様に心から感謝しています。

（東京都立短期大学文化国際学科・照井玲子）

平成11年4月～6月
新入生オリエンテーション合宿実施状況

学校名・学科名		学生	教師	合計
●4月（23グループ）				
東京薬科大学（新入生歓迎キャンプ）＊		258		258
中央大学心理学研究室		42	2	44
共栄学園短期大学・住居、社会福祉学科		254	25	279
共栄学園短期大学・英語学科		61	19	80
東京都立大学・電子、情報工学科		79	10	89
中央大学・独文学専攻		78	8	86
中央大学・国際交流センター（留学生）		150	4	154
武蔵工業大学・建築学科		170	5	175
お茶の水女子大学・理、生活科学部		318	23	341
東京コンピュータ専門学校		215	10	225
港湾職業能力開発短期大学校横浜校		41	6	47
日本女子大学・社会福祉学科		110	15	125
東京都立短期大学・経営システム学科		104	12	116
東京会計法律学園＊		166	8	174
中央大学・教育学研究室		21	8	29
東海大学・西洋史学専攻		62	6	68
十文字学園女子短期大学・家政学科		266	11	277
大妻女子大学・児童学科		130	15	145
大妻女子大学・社会生活情報学専攻		113	5	118
慶應義塾大学・国際センター（留学生）		68	12	80
東京都立大学・応用化学科		61	9	70
東京会計法律学園＊		193	6	199
東京都立短期大学経営情報学科Ⅰ部・Ⅱ部		228	18	246
●5月（21グループ）				
埼玉大学・電気電子システム工学科		35	6	41
創価大学ロシア語専攻		35	11	46
東京学芸大学・幼児教育学科		24	7	31
東京学芸大学・心理臨床学科		35	2	37
日本女子大学・教育学科		86	16	102
東京工科大学・情報通信工学科		124	15	139
東京工科大学・情報工学科		211	14	225
東京工科大学・電子工学科		213	18	231
東京工科大学・機械制御工学科		234	3	237
津田塾大学・英文学科		266	12	278
東京学芸大学・生物学科		36	4	40
東京外国語大学・ペルシャ語		35	5	40
白梅学園短期大学・保育科＊		217	15	232
文教大学女子短期大学部・英語英文科		149	10	159
東京都立大学・機械工学科		35	8	43
武蔵野外語専門学校		17	9	26
明治学院大学第Ⅱ部社会学科		61	11	72
東京都立短期大学・文化国際学科		107	13	120
千葉大学・物理学科		45	5	50
東京学芸大学・障害児教育学科		37	4	41
東京都立大学・建築学科		53	22	75
●6月（1グループ）				
東京学芸大学・生活科学学科		32	2	34
計　45グループ（26校）	実人数	5,275	449	5,724
（注）＊は2泊	延人数	6,107	480	6,587

割引料金のお知らせ

平素より当ハウスを合宿等でご利用いただき、ありがとうございます。当施設では、繁忙期と閑散期の利用率が大きく変動します。閑散期と平日により一層ご利用いただくために、このたび下記のとおり割引料金を設定いたしました。これをご活用いただき、ゆったりと経済的な合宿研修をご計画下さい。なお、詳細はフロントまでお問い合わせ願います。

1.現行制度の改定

現行（太字部分を改定）					変更点
区分	対象	期間	条件	内容	
千人会員	千人会員	通年	本人のみ	宿泊料の10%割引	**割引率20%とする**
多連泊	全団体・個人	通年	1回5泊以上	宿泊料・研修室使用料の10%割引	**1回3泊以上（グループ単位）**
会員校付属	短大生高校生	通年		宿泊料は会員校料金、研修室使用料は非会員校の半額	**宿泊料・研修室使用料とも会員校料金とする**
準会員校付属	高校生	通年		宿泊料は非会員校料金	**宿泊料を会員校料金とする**

2.新しい割引料金

区分	対象	期間	内容	備考
閑散期平日	全団体・個人	3月10日～5月31日および7月15日～9月5日を除く期間の平日	閑散期の平日(金、休前日泊を除く)について宿泊料・研修室使用料を割引する	宿泊料・研修室使用料の20%割引
高校生	上記以外の高校	通年	宿泊料を会員校学生料金の100円増しとする	受付の予約は、6ヶ月前からとする。引率者の宿泊料は会員校教員の100円増しとする

・この割引制度は'99年9月6日より実施します。
・宿泊料および研修室使用料に適用し、団体別基本料金から割り引きます。
・割引料金は、重複しては適用しません。
・ご予約、お問い合わせはフロントまで。TEL：0426-76-8511(9時～17時)　FAX：0426-76-1220

利用状況

'99年4月～6月
＊＝同月2回利用
日帰り利用はグループ数のみ
（延べ人数には日帰り利用者は含まず）

■4月（62グループ、延五、〇八四人）

東洋英和女学院大学講師　石川　卓
日本大学教授　高木　暢之
法政大学教授　牧野　英二
中央大学教授　外間　寛
桜美林大学教授　大庭　篤夫
明星大学教授　光成　豊明
東京薬科大学新歓祭
中央大学教授＊　長谷川幸生
東京学芸大学教授　山田　有策
埼玉大学教授　福岡　安則
明治大学・川口短期大学森久ゼミナール
青山学院大学教授　中澤　進一
中央大学心理学研究室新入生オリエンテーション
東京都立大学電子・情報工学科新入生ガイダンス
中央大学独文学専攻新入生オリエンテーション　小林　晃
日本大学教授
杏林大学教授　熊谷　文枝
埼玉大学教授　山口　和孝
日本大学サマースクール事前研修
中央大学国際交流センター新入留学生オリエンテーション
武蔵工業大学建築学科フレッシュマンキャンプ
お茶の水女子大学理・生活科学部新入生セミナー　浮田　静雄
工学院大学助教授
日本女子大学社会福祉学科新入生オリエンテーション
東京都立短期大学経営システム学科新入生オリエンテーション
中央大学教育学研究室新入生オリエンテーション
東海大学西洋史学専攻新入生研修会
大妻女子大学児童学科新入生オリエンテーション
大妻女子大学社会生活情報学専攻新入生オリエンテーション
慶應義塾大学国際センター新入留学生オリエンテーション
東京都立大学応用化学科新入生オリエンテーション　中江　幸雄
立教大学教授　大河原美以
東京学芸大学助教授　加藤　哲郎
一橋大学教授
東京都立短期大学経営情報学科Ⅰ部・Ⅱ部新入生オリエンテーション
法政大学教授　松尾　章一
東京農工大学教授　秋山　三郎
共栄学園短期大学住居・社会福祉学科新入生オリエンテーション
共栄学園短期大学英語・秘書専攻新入生オリエンテーション
都留文科大学教授　三井須美子
東京コンピュータ専門学校新入生オリエンテーション
港湾職業能力開発短期大学校横浜校新入生オリエンテーション
東京会計法律学園就職合宿＊　堀野　定雄
神奈川大学助教授
十文字学園女子短期大学家政学科交歓会
マレーシア政府派遣留学生（日本インドネシア科学技術フォーラム）
現代と経済
Straus読書会
在英日本人宣教会
からだとこころの出会いの会
宮前リコーダーアンサンブル
中国女性史研究会
老人保健施設はなみずき
システムインテグレート
日本分光
ケンウッド
自費出版ネットワーク
ベルモント化粧品
システム・アナライズ・コーポレーション
（個人利用）
中央大学大学院　佐田啓二

■5月（68グループ、延四、一四〇人）

専修大学教授　麻島　昭一
駒澤大学教授　上條　末夫
埼玉大学電気電子システム工学科新入生ガイダンス
学習院大学教授　坂本孝治郎
中央大学白門会
学習院大学シェイクスピア・ドラマ・ソサエティ　竹内　啓一
駒澤大学教授
芝浦工業大学電子計算機研究会
日本大学教授　北野　弘久
東京学芸大学教授　鷲山　恭彦
順天堂大学医学部M2クラスセミナー
東京学芸大学幼児教育学科新入生合宿
中央大学教授　中川洋一郎
中央大学音楽研究会混声合唱部
上智大学マスメディア研究会
東京学芸大学心理臨床学科新入生合宿
日本女子大学教育学科新入生オリエンテーション
東京工科大学フレッシュマンセミナー
情報通信工学科
情報工学科
電子工学科
機械制御工学科
津田塾大学英文学科新入生オリエンテーション　湊　博昭
一橋大学助教授
東京学芸大学生物学科新入生合宿研修
東京都立大学教授　奥村　哲
立教大学助教授　郭　洋春
武蔵工業大学教職課程
桜美林大学教授
明治大学講師　柳原　敦夫
東京外国語大学ペルシャ語合宿研修　中村　幸安
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション
文教大学女子短期大学部英語英文科フレッシュメンセミナー
東京都立大学機械工学科新入生ガイダンス
中央大学カールトン大学短期留学合宿
中央大学講師　高石　昌子
明治学院大学社会学科第Ⅱ部フレッシュマンキャンプ
東京理科大学教授　志水　英樹
東京都立短期大学文化国際学科新入生オリエンテーション
中央大学教授　青野　寿彦
千葉大学物理学科新入生オリエンテーション
中央大学教授　高窪　利一
東京薬科大学生協組織部
慶應義塾大学教授　渡辺　吉鎔
東海大学教授　師岡　孝次
立教大学教授　栗原　彬
東京学芸大学障害児教育学科新入生オリエンテーション
東京都立大学建築学科新入生オリエンテーション
明治大学付属明治高等学校・中学校
筑陽学園高等学校野球部
創価大学ロシア語専攻
帝京科学大学助教授　小川　家資
拓殖大学長期留学プログラム合宿研修
武蔵野外語専門学校新入生オリエンテーション　野田　陽子
淑徳大学助教授　李　燕
創価大学助教授
グレースハーモニー
生化学若い研究者の会
マスターピース
日本キリスト教海外医療協力会
ブルーベル・ソサエティ
三鷹バプテスト教会
クリエイティブ・アート実行委員会
日本自然保護協会
在日大韓基督教会青年会関東地方連合会
小松ゼノア
国際航業
システム・アナライズ・コーポレーション
（日帰り利用）
平成11年度協力会員校事務連絡会

■6月（36グループ、延二、〇〇三人）

中央大学教授　田中　拓男
一橋大学講師　阿久津　聡
杏林大学新入職員フォローアップ研修
東京学芸大学生活科学学科新入生オリエンテーション　渡辺　吉鎔
慶應義塾大学教授　熊本　一規
明治学院大学教授　松田まゆみ
桜美林大学教授　寺田　実
東京大学助教授
立教大学基礎文献講読ゼミ
明治学院大学教授＊　宮野　彬
法政大学教授　陣内　秀信
東京工業大学科学哲学ゼミ
中央大学教授　桐山　昇
立教大学高原・笠井ゼミ
東京学芸大学教授　佐久間良子
帝京大学教授　柴川　林也
成蹊大学国際交流センター
学習院大学理論物理学研究室
国際基督教大学教授　R・H・スラッシャー
法政大学助教授　島本美保子
立正大学教授　松原　達哉
厚木看護専門学校
日本女子大学附属高等学校
関東学生オリエンテーリング連盟
郡内研究会
第27回十大学合同セミナー
第20回日豪合同セミナー
日本・パキスタン協会
日本建築学会農村計画委員会
東京ブロックフレーテン・コーア
ガールスカウト東京都第26団訓練キャンプ
ルソール合奏団
富士電機
日本分光
農村環境整備センター
（日帰り利用）
道路公害反対運動全国連絡会
表千家一里庵

1999年（平成11年）度・主催プログラム開催予定

■大学共同セミナー・大学院共同セミナー

回　数	期　間	主　題	講　師
第17回 （大学院共同セミナー）	1999年10月22～24日 （２泊３日）	カルチュラル・スタディーズとグローバリゼーション――国民国家、『第３世界』、ディアスポラ	上野俊哉、岡　真理、田崎英明、小森陽一、本橋哲也、吉見俊哉
第181回	1999年12月10～12日 （２泊３日）	フィールドワークの技術 （仮題）	山中速人、他
第182回	1999年12月17～19日 （２泊３日）	地球市民になろうpart3 （仮題）	伊藤孝之、杉田明宏、他

■国際学生セミナー

第26回	1999年11月19～21日 （２泊３日）	21世紀の世界秩序をどう創っていくか―パワー・マネー・エシックス	波多野啓雄、金子　譲、宇佐美滋、滝田賢治、大芝　亮、勝俣　誠、山本吉宣、渡邊啓貴、茅原郁生、石見　徹、ロナルド・モース

■大学教員研修（FD）プログラム

第18回	1999年9月18～19日 （１泊２日）	授業をどうする－あなたは学生に何を伝えたいか－	示村悦二郎、佐々木一也、堀喜久子、佐藤久美子
第19回	2000年1月22～23日 （１泊２日）	(未定)	(未定)

■大学職員研修（SD）プログラム

第２回	1999年10月12～13日 （１泊２日）	国・公・私立の殻を破って話し合おう――これからの大学をどう支えるかpart２ ――	寺脇　研、黒羽亮一、桐原保法、井原　徹

■土曜セミナー

第３回	1999年９月11日	地球環境を考える	井口泰泉、市村禎二郎
第４回	1999年10月９日	現代医療の問題点…とくに安全を巡って	村上陽一郎
第５回	1999年11月27日	映画と美術のイリュージョニズム（仮題）	藤枝晃雄、谷川　渥、小松　弘
第６回	（未定）	スバルでどこまで宇宙が見られるか（仮題）	(未定)

お問い合わせ・お申し込みは企画室まで　ＴＥＬ…０４２６―７６―８５３２
ＦＡＸ…０４２６―７６―０２６６
E-mail　iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp

■その他のセミナー

	1999年10月23日	ワインアカデミー	森島紀道
	1999年12月17～19日	炭やきアカデミー	岸本定吉、高橋哲夫、広若　剛

お問い合わせ・お申し込みはフロントまで　ＴＥＬ…０４２６―７６―８５１１
ＦＡＸ…０４２６―７６―１２２０

●館長室から●

八月は太平洋戦争を思い出させる月である。六日には廣島がヒロシマになり、九日には長崎がナガサキになった日として、それぞれ原爆被災者の慰霊式が行われる。そして十五日の終戦記念日には、戦没者への黙祷が捧げられる。

初夏を迎える頃に、不戦兵士の会の小島清文氏から「戦争と人間」（昭和出版）の御著書を頂いた。戦艦大和の暗号士、そしてフィリピンの戦場では陸戦隊長として、部下の生命と国家とは何かを熟慮しつつ、惨憺たる戦場をさまよわれた苦悩と辛苦が語られている。

ヒロシマで死体のひしめく街を重傷者の群れにいた母親を探し当てるまで放浪した数日間も悲惨であったが、氏の歩かれた戦場は敵地のうえに同胞相搏つ極限状況であったから、その惨状は想像を絶するものがある。その一部は、昨年の第一七七回大学共同セミナー「地球市民になろう・２」でもお話し戴いたが、若い学生はじめ多くの方々に感銘を与えた。

そして氏が結ばれたのは、個の確立の大切さであった。その上で、それぞれの社会観や世界観を育てることの重要性を訴えられている。自分自身の生き方を問い、どのように生きるべきかを考えることを忘れがちな平和に慣れた現在であるがゆえに、教育の本質についても特に考えさせられる鋭く重い問いかけである。

御療養中の氏の早い御快癒を念じたい。

（佐野）

表紙の写真＝5月18～20日に行なわれた白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーションのひとこま

セミナー・ハウス
1999年4・5・6月分（年4回）
第155号
定価：200円
発行＝財団法人　大学セミナー・ハウス
〒192-0372　東京都八王子市下柚木1987-1
TEL　0426-76-8511　FAX　0426-76-1220
振替口座　00150-1-74590
発行人＝佐野　博敏
編集＝大学セミナー・ハウス企画室
制作＝中山企画
SEMINAR　HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
No.155　(April～June, 1999)